

大学

アーカイヴズ

全国大学史資料協議会東日本部会会報

2023.3.31 No.68

Japan Association of College and University

Archives : Eastern Japan Division

目次

・名誉会員松崎彰さんのご逝去について	1
・桜井昭男「全国大学史資料協議会2022年度総会・全国研究会・見学会に参加して」	6
・阿久津朋子「2022年度全国研究会に参加して」	8
・平崎真右「「杉村楚人冠と我孫子」講演および見学会に参加して」	9
・恋川智子「第131回研究会（国士舘大学）に参加して」	11
・全国大学史資料協議会2022年度役員会議事録	13
・全国大学史資料協議会2022年度全国総会・研究会記録	13
・全国大学史資料協議会東日本部会幹事会議事録	16
・全国大学史資料協議会東日本部会研究会記録	18
・全国大学史資料協議会東日本部会会員名簿	19

名誉会員松崎彰さんのご逝去について

東日本部会名誉会員の松崎彰さんが2022年10月18日にご逝去されました。

松崎さんは中央大学大学史編纂課（現 大学史資料課）にご勤務され、東日本部会の前身である関東地区大学史連絡協議会発足時から当会を牽引していただきました。また、東日本部会名誉会員となってからも当部会の運営について種々のご助言を賜りました。謹んで松崎さんのご冥福をお祈り申し上げます。

本号では、松崎さんと長く交流のあった方々に追悼文をご執筆いただきましたのでご紹介いたします。

思い出・二話

鈴木 秀幸（名誉会員、元明治大学史資料センター）

全国大学史資料協議会（以下、「協議会」）のことを語る時、松崎さんの業績は絶対に欠くことは出来ない。とりわけ、その設立から東西団体の合併、その後の運営といったこと

の活躍には敬服するばかりであった。

松崎さんには会議や研究会等が終了すると、常に幾人かの人達が寄っていき、話を聞いたり、時には相談にものっていた。その後、皆に声をかけると一同懇親会に繰り出した。元々、御自身も食べ物嗜好が強かったようでもある。それが終ると、時々私に「もう一軒」

にも立て板に水を流すがごとくであった。

本会の動きは西日本の大学側にも伝わり、翌年、西日本大学史担当者会が組織され、二度ほど同会員を本会に招いて講演をしてもらったが、そうした経験を経て平成3(1991)年5月9日の年度総会で東西合同研究部会開催案の承認を経て翌年9月30日から3日間、京都・大阪で開かれた。この間、本会から松崎さんら幹事が出向して西日本側担当者と問題点の調整に努められ、これが全国大学史資料協議会東・西日本部会に拡大する端緒になった。

翻って大学内に目を転ずると大学史研究業務は、何年後に創立〇〇周年記念を迎えるから年史の刊行をとって編纂委員会が急遽組織されるが、終わると組織は解散となり、継続する大学は稀で、存続しても大学側の理解度は案外低く、組織上弱い立場に有る。折角蒐集した数多な貴重資料も散逸は免れず、人材の育成にも大いに支障を来す。松崎さんもその洗礼を受けたのではなかったかと心配した事も有ったが、顔には出さず笑顔を絶やさなかった。総会では推されて「万年議長」を引受けたが、議題が一段落した所で、出席者に松崎さんの労苦に感謝の拍手を求め、賛同の拍手が松崎さんを温かく包んでくれた。せめてものお礼であった。



会が今有るのも松崎さんの「数トンの汗水、のお陰であると言っても過言ではないだろう。合掌

松崎彰君を偲んで

澤木 武美 (名誉会員、元神奈川大学大学資料編纂室)

松崎彰君が亡くなった。まだまだ活躍できる年齢だったのに残念であった。松崎君とは全国大学史資料協議会の前身である関東地区大学史連絡協議会設立当初からの付き合いだ。松崎君は明るく、なんでも積極的にやる、やさしい人で本会の設立から今日の組織へ至る歩みには欠かすことのできない貴重な人材である。

ただ、松崎君には権威的な人に対してかなり厳しい面があり、本会の研究会に神奈川大学の網野善彦先生を講師として招いた時(1994年1月20日研究会、講演・網野善彦「資料学をめぐる諸問題について」)には松崎君が網野先生の甥である中沢新一氏に対して異常な関心を抱いていることがわかり、講演後の飲み会でかなりモメるのではないかと皆で心配した。しかし、この時は、無事飲み会は終わりホッとしたものである。

松崎君は中央大学の嘱託職員として勤務しながら大学史協議会でリーダーシップをとり積極的に活動していた。その松崎君にS学園が自校の大学史担当者として松崎君の引き抜きをはかり、それに成功した。松崎君は、長年勤めてきた中央大学を去り、S学園の大学史担当者としての歩みを開始した。この松崎君の行動に周りの人々は賛意を表した。松崎君の将来にこのことはよく働くと考えたからだ。しかし、このような状態は長くは続かな

かった。S学園に起こった職員の内紛が松崎君の運命を変えた。この内紛によって松崎君が就いたばかりの大学史担当者を辞めざるを得なかったのである。このへんの詳しい事情は良くわからないが、内紛の前兆として松崎君が大学史の担当者になっていたであろう。

中央大学を去った松崎君の新天地、S学園も追われたのである。松崎君のこのような対応は不運としかいいようがないが、またどんな人がこのような事態に追い込まれるかも知れない。みんなで自衛するしかないのだろうか？

松崎彰さんの表情

石田 順二（名誉会員、元武蔵野美術大学
大学史史料室）

私が東日本部会の活動に参加できるようになったのは2002年からである。事務局は中央大学で、松崎さんは実質的に一人で幹事会、研究会、そして部会総会、全国大会の企画、運営を中心となって切り回していた。2003年3月の幹事会で、次年度の幹事の役割分担を協議した時、引き続き事務局となる中央大学の補佐として武蔵野美術大学は事務局に加わりたく私は手を挙げた。松崎さんの負担の一部を担えたらと考えた。武蔵美は通知状、印刷物の受発送や会員名簿のデータ管理など、物理的に手を動かす業務を引き受けた。が、松崎さんの負担がどれだけ軽減したかは疑わしい。このような二人三脚とも到底呼べない事務局活動は5年間続いた。

2008年1月の幹事会だったと思うが、松崎さんから次年度図書館への異動の内示があり、かつ中央大学は幹事校から退くことになったとの話があった。幹事会は静まりか

えった。私も驚き途惑った。松崎さん抜きの武蔵美の事務局はあり得ない。重苦しい雰囲気が続く中、不安は多々あったが事務局を続けることを表明した（日本大学も手を挙げてくれた）。翌日から、当面そして先行きになすべきことなど思いつくままの疑問を毎日、松崎さんに電話で教えてもらうことになった。メールでは質疑応答のやり取りがまどろっこしかった。中央大学では電話の取り次ぎにうんざりしていたことだろう。電話は数ヶ月に渡り続いた。熱烈な恋人のラブコールさながらだった。このエピソードこそが、事務局内で担っていた業務の質の差を表しているといえる。

最後に松崎さんの表情について触れておきたい。研究会、総会などの進行役としての、にこやかな和らいだ表情に、初めて参加、出席した人は緊張が解けたことだろう。かつての私もそうだった。それは巧まずして醸し出される彼の優しさによるものだった。そしてもう一つ、幹事会の前後に議題と関係のない話題を切り出した時の表情である。大きめの眼を更に見開き、頬を紅潮させ、口をややとがらせ真剣に話すのである。彼の好気心が、一途さが表れ思わず話に引き込まれた。考えてみると、その表情に魅入られて、私は2003年、事務局に手を挙げたのかもしれない。

「口角泡を飛ばす」我が友の逝去を悼む

西口 忠（西日本部会名誉会員、桃山学院
史料室特別研究員）

今年1月13日のメールで松崎彰の訃報を知った。驚きであった。メールを見た後、すぐに元関西大学の熊博毅氏に電話を入れた。

2014年、大阪での全国大会。懇親交流会

にも出さずに、ニコニコとした笑顔で現れました。その時に飲んだコーヒーの味は、えも言われぬものとなりました。

自治体史編纂の終了後、しばらく松崎さんとお会いする機会はありませんでしたが、この協議会において、再びお目にかかることになりました。私は自治体史編纂とは別に、立教学院 125 年史編纂の仕事にも関わっていましたが、その編纂の終了を機に、立教大学に「立教学院史資料センター」というアーカイヴズ組織が設置され、その業務を担うことになりました。しかし、大学史の世界については、右も左もわからないような状況であったため、協議会の門を叩くことにしました。

ちょっと緊張しながら初参加した協議会で

は、以前と全く変わらないニコニコとした笑顔の松崎さんに、出迎えていただきました。そして研究会終了後、「豊田くん、この後飲みに行くけど、どう？」との嬉しいお誘いをいただいたことは、昨日のこのように思い出されます。

酒席では、唐辛子で真っ赤になった焼き鳥を片手に、学生時代の面白話や、大学史に関する話を熱く語ってくれました。そんな松崎さんの姿からは、いつも元気をいただいていたように思います。

とりとめもない話となってしまいましたが、在りし日の姿を偲びつつ、松崎さんの心よりのご冥福をお祈りさせていただきます。

2022年10月5・6日（水・木）研究会

全国大学史資料協議会2022年度総会・全国研究会・見学会に参加して

淑徳大学アーカイヴズ 桜井昭男

今年度の全国大学史資料協議会の総会・全国研究会は、2022年10月5日・6日に神奈川大学みなとみらいキャンパスの米田吉盛記念講堂で開催され、見学会は翌7日に神奈川県立公文書館で行われた。新型コロナウイルスの流行のため、3年ぶりの対面を含めたハイブリッドの大会である。感染対策をはじめ大会開催の準備にあたられた神奈川大学ならびに関係各位に感謝申し上げたい。

大会は5日の午後にまず総会が開かれ、その後神奈川大学日本常民文化研究所所長の安室知氏が「日本常民文化研究所と渋沢敬三の思い」と題する記念講演をされた。日本常民文化研究所が1921年に渋沢敬三によって

「アチック・ミュージアム」として発足し、2021年に創立100周年を迎えたことから、氏の講演は研究所の次なる100年に向けて創立者である渋沢の思いをいかに継承していくのかを検証するものであった。氏はまず渋沢の研究活動をたどり、その特徴として①民俗学方法論に修正をせまったこと、②モノの重要性を示し「民具学」という新学問領域を開拓したことの2点をあげ、それが学問の領域を超えた「総合資料学」をめざすものであるとともに博物館機能を重視するものとして、今後の常民文化研究所がめざす方向性につながっていくことを述べられた。歴史をふまえた研究所の新たな展開に注目したいと思

う。

記念講演の後に開催された全国研究会は、「地域と大学」をテーマとし、2006年の教育基本法の改正以降大学に「社会貢献」や「地域連携」といった活動が求められる中で、大学アーカイヴズが果たすべき役割について検討するとして3本の報告が行われた。

大阪商業大学産業史博物館の明尾圭造氏による第1報告は、学内外のコレクションを活用し、また地域の郷土文化研究サークルとも連携して地域学の拠点として活動していることを報告された。大学博物館が地域連携の「HUBステーション」として機能することの重要性を述べられたことに、大いに刺激を受けた。

帝京大学総合博物館の堀越峰之氏による第2報告は、地域貢献を目的に2015年に開館した同博物館について、大学博物館の社会的役割の模索と、「人間形成の場」としての大学博物館という視点によって、「地域と大学の相互発展」をめざすという運営のあり方に到達したことを報告された。大変重要な論点であり、同博物館が展開する「多摩のヨコガオ発見プロジェクト」やフリーマガジン『ミコタマ』の刊行など、その実践に注目していきたいと思う。

自由学園資料室の村上民氏と菅原然子氏による第3報告は、前2本の報告とは異なり、2021年に創立100周年を迎えた自由学園が行ってきた、学園全体による「地域協働活動」の事例報告である。1921年に東京市豊島区に設立された自由学園は、1934年に東京府下東久留米に移転し、「学校から社会へ」を

モットーに活動を行った。移転前より関東大震災救援活動や卒業生による社会活動、また「自由学園セツルメント活動」などを幅広く展開し、戦後も積極的に地域社会との関係を築き上げていった。学園としての戦前から一貫した地域連携活動は、他の大学にとっても大きな示唆を与えてくれるものといえる。

以上3報告の後全体討論が行われた。ここでは各報告の内容に従い、①専門博物館と地域連携、②地域にとっての大学博物館、③学園と地域の共生、というテーマが取り上げられ、大学や大学博物館が地域とどう関わっていくのかという点について意見が交わされた。さらに、アーカイヴズと大学博物館との関係、地域資料の収集の問題、自治体及び自治体博物館との関係などへも議論が及び、大変意義深い全体討論となった。大学博物館や大学と地域の関わり方は千差万別であるが、今後大学や学園自身が中心となって地域との関係を作り上げていくことと、大学博物館による活動を車の両輪として機能的に展開させていくことが求められているように感じた。そして、そのためにさらに多くの取り組み事例を共有しながら、各大学での実践を蓄積していくことの必要性を感じた。

10月7日は、神奈川県立公文書館の見学会が行われた。悪天候で10月にしては大変寒い日であったが、33名の参加があった。見学会はまず公文書館の関根豊氏から「神奈川県立公文書館の業務と施設—公文書の評価選別を中心に—」と題し、神奈川県における公文書管理の実際について報告いただいた。神奈川県のおける他県と異なる特徴である、①公文書

館への警察以外の公文書の全量引渡し、②中間保管庫の機能、③公文書館のみによる評価選別、について説明を受けた。その後、具体的に館内の見学をさせていただき、公文書の収集から評価選別、そして保存にいたる全体

の流れを詳しく紹介いただいたことは実に有意義であった。見学会は、最後に館の企画展示「諸外国とつながる神奈川」を見学して散会した。

2022年度全国研究会に参加して

武蔵野美術大学大学史史料室 阿久津朋子

2022年度の全国研究会は新型コロナウイルス蔓延により叶わなかった対面開催が、3年ぶりに可能となった。オンラインとの併用開催とし、2021年4月に開設したばかりの神奈川大学みなとみらいキャンパスを会場とした。

1日目は神奈川大学日本常民文化研究所所長の安室知氏より「日本常民文化研究所と渋沢敬三の思い—大学博物館設立に向けて—」と題してご講演頂いた。財政界人としての顔を持ちながら、歴史研究を重ねた渋沢敬三。もともと動物学者になりたかったという渋沢が「生物学的人生観」という新たな視点を用いて、「生きた民具」という生態学的アプローチを行ったという話に惹きつけられた。何かを追求する時に、その世界だけで考えてしまう事が多々あるが、追求するからこそ別な世界の視点が必要である事を改めて気付かされ、学びとなった。

2日目はテーマを「地域と大学」として研究会を開催。まず、大阪商業大学の明尾圭造氏が商業史博物館の活動をもとに報告。地域のサークル活動に場所だけでなく費用も提供するという事に驚いた。さらに、サークルの活動には口は出さないようにし、人々が自

ら考え動くことに協力しているという方法に感銘を受けた。

次に帝京大学の堀越峰之氏の報告。「地域には魅力だけではない、地域課題が必ずある」ということを考えた時、与える・与えられるという関係を超えて、学びあう「人間形成の場」が得られるのではないかという思いを持ち、実践しようとしているという堀越氏の言葉が印象的だった。

第3報告は自由学園の村上民氏と菅原然子氏。今回の中では一番、地域と共に発展してきた学校であるという印象を得た。1930年に「自由学園農村セトルメント」という若い女性のために生活学校を開設。台所や食堂だけでなく、託児所や診療所までも備えた施設では、学校だけが女性たちに何かを教えたわけではなく、地元の人も機織りなどを



教えていたという。その後も地域と連携しての活動は多岐に亘り、東久留米市立図書館との協働で地域資料展も開催。まさに地元根付いた学校としての理想型であろう。

今回の研究会を通し、これまで自校の史料

をどう収集・保存するかという事に意識が向いていたが、それだけでは史料自体の活用範囲も狭まってしまうことを実感した。大学として史料を遺す意味を改めて考える時がきていると感じた研究会であった。

2022年12月15日（木）研究会

そじんかん
「杉村楚人冠と我孫子」講演および見学会に参加して

拓殖アーカイブズ事業室 平崎真右

2022年12月15日（木）に開催された、第130回全国大学史資料協議会東日本部会研究会について、以下に報告を行う。当日は、小林康達氏やすみちによる「杉村楚人冠と我孫子」と題した講演の後、「杉村楚人冠記念館」の見学が行われた。ここでは講演内容と見学会についてそれぞれ概要を記し、最後に簡単な所感を述べてみたい。

まず小林氏による講演だが、「NPO法人ACOPA 多目的ホール（ABIPOsホール）」を会場に行われた。杉村楚人冠（1872-1945 本名・広太郎 以下、楚人冠）に関する話題の前に、我孫子市について簡単な説明がなされた。利根川と手賀沼に挟まれた地勢上の特徴や、宿場町としての歴史、明治以降には嘉納治五郎や志賀直哉、武者小路実篤といった著名人たちの別荘があったことなどが紹介されたが、今回の主要人物である楚人冠もまた、我孫子に別荘を有していたうちの一人である。

楚人冠の生涯は、1903（明治36）年に東京朝日新聞社に入社する前と後で、大きく分けられると言う。1872（明治5）年、旧紀

州藩士の家に生まれて早くに父親を亡くして以後、和歌山中学校における校長との衝突および退学、上京してからの英吉利法律学校（現・中央大学）における法律や英文の学び、国民英学会や青年文学会、自由神学校、社会主義研究会、仏教清徒同志会といった諸団体との積極的な関わりや鎌倉円覚寺への参禅など、試行錯誤を重ねた前半生を送る。その後、27歳で務めた米国公使館を31歳のときに退職し、池辺三山の引き抜きにより東京朝日新聞社へと所属を移す。英語に堪能な楚人冠は35歳のときロンドンへと特派され、その際にタイムス社の索引部に注目したと言う。その索引部を参考に1911（明治44）年、



講演会の様子

東京朝日新聞社内に「調査部(はじめ索引部)」を設置したとされ(この点はアーカイヴズとも関わるため後述する)、中央大学新聞研究科の開設や、慶應義塾大学新聞科設置(三田新聞会も含む)にも深く関与するなど、社内外にわたり精力的に活動する。

つづいて手賀沼と楚人冠の関わりに話題が及んだが、楚人冠は1911年11月に鴨猟を取材したことをきっかけに手賀沼に魅せられ、翌年には我孫子に別荘(白馬城)を建てる。手賀沼は近世期より干拓事業が行われてきたが、大正期にも干拓計画が数度起こり、楚人冠はそのたびに反対の論陣を張る。1923(大正12)年の関東大震災を機として我孫子の別荘に移住し、1926(大正15)年には、同じく我孫子に別荘を有していた嘉納治五郎らと手賀沼保勝会の結成をめざすなど、ここでも精力的に活動した。講師の小林氏によれば、楚人冠たちは干拓という選択肢ではなく、新しいまちづくりができないかと考えていたとも言う。講演の後は、仏教関係者と楚人冠の人的ネットワークや、記念館での史資料管理などについての質疑が寄せられた。

次に、場所を「杉村楚人冠記念館」に移した見学会が、武藤真奈学芸員による解説のもと行われた。記念館の建物は、楚人冠の住居をそのまま利用したものである。その建物はアメリカ帰りの建築家・下田菊太郎の設計になるが、楚人冠と下田はたびたび対立したことや、竣工後に楚人冠みずから大きな改装を施したことなど(例・和室床の間の天井を高く切るほか)、トリビアなエピソードもま

じえた見学となった。楚人冠に関する常設の資料展示以外にも、企画展「手紙にみる歴史の断片」が開催中で興味深い資料(大逆事件時、獄中の管野須賀子が楚人冠にあてた「針文字書簡」ほか)を閲覧でき、その後も記念館が建つ敷地内の庭園の案内も受けるなど、充実した内容であった。



見学会の様子

最後に、研究会で得た知見について簡単に記してみたい。今回、楚人冠という人物の近代史上に果たした重要性の一端を学ぶことができたが、とりわけアーカイヴズという点においても、逸することのできない人物であることが感得された。そのことは、先述した東京朝日新聞内に「調査部」を設置したことや、このほか1919(大正8)年には日本で初めてとなる「新聞縮刷版」を発案・発行した点などに象徴的である。この点は講師である小林氏も指摘されたことだが、配布資料中にも引用された「調査部員執務の心得」のうち、「切抜及索引は糠味噌の如く心得べし。日々手を入れてかきまはすことを忘るべからず」や、「調査部は年を重ねるに従ひて価を増すものなり。編輯部の今日の功過が明日すぐ顕はれずとも、泰然として百年の知己を待つべし」(『新聞紙の内外』1926年より)といった言

葉には、なんらかの歴史資料の収集や整理に携わるものたちにとって、今日でもなお参照に値するものがあると思われる。報告者自身、これまで楚人冠という人物についてまったく不勉強であったが、近代日本におけるメディア史のみならず、アーカイヴズ史というものを考えていくうえでも、楚人冠という人物を再検証していく必要と意義があることを強く感じたことを記しておきたい。

楚人冠記念館とほど近い手賀沼は、楚人冠

をはじめとする有志の人々による反対運動を経つつも、その後も干拓事業自体は継続され、いま現在に至っている。我孫子の対岸側ではあるものの、2年間の学部生活を手賀沼にはほど近いキャンパスで過ごした報告者にとって、同地は個人的な思い出の詰まった場所でもある。若干の懐かしさを抱きつつ、歴史的過去を再把握していくことの重要性にあらためて気づかされた研究会であった。

2023年1月26日（木）研究会

第131回研究会（国士舘大学）に参加して

多摩美術大学 大学戦略室大学史担当 恋川智子

全国大学史資料協議会東日本部会研究会が、1月26日木曜日に国士舘大学世田谷キャンパス内メイプルセンチュリーホールにて開催された。

キャンパスは緑豊かな松陰神社に隣接しており、吉田松陰の精神を範とする国士舘大学の建学の理念を反映した説得力のある立地に感銘を受ける。

今回は2023年最初の研究会となるが、私事で恐縮ながら1月に大学史担当に着任した私にとっても初めての研究会であった。

プログラムは、2本の講演と国登録有形文化財に指定されている大講堂の見学。オンラインによる参加にも対応されており、講堂見学まで中継が入るとのこと。コロナ禍も4年目を迎え、オンライン開催の浸透を改めて実感する。

冒頭に国士舘史資料室室長・国士舘大学副

学長である長谷川均先生よりご挨拶をいただいた。国士舘大学で研究会が実施されるのは2011年1月の第74回以来12年ぶりとのこと。前回は百年史編纂事業の取り組み始めの頃、今回は事業が終了した時期。奇しくも研究日の開催された1月26日は国士舘大学創立者である柴田徳次郎の祥月命日と伺う。節目となる時期での開催が感慨深い。

最初の講演は、今年度で定年退職される国士舘大学政経学部教授で当協議会個人会員で



ある、阿部武司先生による「企業アーカイブズと大学アーカイブズ——企業史料協議会での経験より」。大阪大学アーカイブズ初代室長、全国大学史資料協議会機関会員、経営史学会会長、企業史料協議会副会長を歴任されてこられた阿部先生ならではの視点から、企業史の変遷と学術的意義について俯瞰的に語られた。企業史料協議会の成り立ちとその活動、日本企業における社史の変質とそれに伴う研究者の方々のとる立場、海外企業におけるアーカイブ活動等、大変勉強させていただくことができた。



次に国土館史資料室、熊本好宏氏による「百年史編纂事業と国土館史資料室の取り組み」。国土館大学と国土館史資料室の概要と沿革を簡潔にご紹介された後、2021年に終了された百年史事業について詳細に語られた。百年史を見据えた八〇年史、九〇年史の編纂、オーラルヒストリーの扱い方等、興味深いお話が続く。続いて今後の資料の活用方針と取り組みについて説明された。特設サイトや収蔵資料データベースの公開、大講堂の活用、講演会、博物館実習生の受け入れ等、主に研究から活用への移行を意図していると伺い、阿部先生が語られた企業史の変質との

連動を感じた。

場所を移動して大講堂見学。100余年前の1919（大正8）年移転時より唯一現存する建築物と伺い、期待が高まる。西洋風建築の予想に反した純日本式の講堂は、調和のとれた端正な佇まいで100年の歴史が肌に染み入るようであった。



堂内にて学生さんによるガイドを拝聴。構造や歴史、展示物について淀みなく説明されている様子から、国土館大学が大学史教育に真摯に取り組んでおられることを実感した。

最後に柴田会館に設置されている国土館史資料室展示室を自由見学。年表や記録写真に加えて、柴田徳次郎愛用の馬具やスポーツに強い国土館ならではの道着など特徴ある展示が目をついた。

会員の方々と情報交換の場も持つことができ、新米大学史担当として大変意義深い研究会であった。このような機会を提供して下さった関係者の皆さまに深く感謝を申し上げます。

全国大学史資料協議会 2022年度役員会議事録

日時 2022年10月5日(水)
12:30～13:15
場所 神奈川大学みなとみらいキャンパス
4階・米田吉盛記念講堂
Zoom 利用によるハイブリッド方式
出席 (東日本部会)
神奈川大学 國學院大學 淑徳大学
専修大学 大東文化大学 帝京大学
東海大学 日本大学 武蔵野美術大
学 明治大学 古俣達郎
(西日本部会)
大阪女学院 大阪大学 関西大学
関西学院 同志社大学 広島大学
桃山学院 立命館 古野貢

議事

- (1) 2022年度全国総会・研究会の運営について
東日本部会事務局・明治大学より、東日本部会2022年度事業計画について、以下の報告があった。
 - ・2022年度全国総会・研究会は神奈川大学みなとみらいキャンパスを会場に、ハイブリッド方式で開催すること。
 - ・2022年6月2日、2022年度東日本部会総会・研究会を専修大学神田キャンパスを会場に、ハイブリッド方式で開催した。
 - ・2022年度東日本部会幹事会を2022年4・6・7・9・10・12月、2023年1・3月に開催すること。
 - ・2022年度東日本部会研究会を2022年7・10・12月、2023年1・3月に開催すること。
 - ・『大学アーカイヴズ』第67・68号を発行すること。
 - ・全国大学史資料協議会ホームページの

活用やセキュリティについて。
西日本部会庶務・大阪女学院より、西日本部会2022年度事業について、以下の報告があった。

- ・2022年5月25日、2022年度西日本部会総会を関西大学千里山キャンパスにおいて開催した。
 - ・西日本部会2022年度事業計画、及び2023年度の全国総会・研究会を立命館大学で開催予定との報告があった。
- (2) 協議会役員交代について(2022・23年度)
東日本部会事務局・明治大学、及び西日本部会庶務・大阪女学院より、両部会の役員について報告があった。
 - (3) 2022年度の東西両部会の共同事業について
 - ・西日本部会会計・関西大学より『研究叢書』第22号について、2022年10月に発行すること、発行部数は450部であること、配付については郵送とすることについて報告があった。
 - ・東日本部会ウェブシステム担当・日本大学より、全国大学史資料協議会ホームページのセキュリティ対策等について報告があった。
 - (4) その他
東日本部会会計・東海大学より、2022年度全国総会・研究会にかかる経費について、東日本部会が負担することを報告した。

全国大学史資料協議会 2022年度全国総会・研究会記録

2022年度の全国大学史資料協議会全国総会は、10月5日(水)に神奈川大学みなとみらいキャンパス4階・米田吉盛記念講堂において開催した。また、本総会はZoomによる参加も受け付けるハイブリッド方式であっ

た。議題及び配付資料は以下のとおりである。

1 議題

- (1) 2022 年度全国大学史資料協議会役員会について
- (2) 2022 年度東日本部会・西日本部会事業計画報告

2 配付資料

- (1) 「全国大学史資料協議会東日本部会 2022 年度事業計画書」
- (2) 「全国大学史資料協議会西日本部会 2022 年度事業計画書」事業計画報告

記念講演

安室知氏（神奈川大学日本常民文化研究所
所長、国際日本学部教授）
「日本常民文化研究所と渋沢敬
三の思い——大学博物館設立に
向けて」

日 時 2022 年 10 月 5 日（水）
15:00 ～ 16:00

（概要）日本常民文化研究所は、次の 100 年に向けた将来構想を策定し、国際常民文化研究機構が担ってきた共同利用・共同研究の拠点としての機能を受け継ぎ発展させる、博物館機能を強化する、という 2 つの大きな柱を将来計画として提出した。この変化の中で、日本常民文化研究所に創立者渋沢敬三の思いがいかに受け継がれているか検証することを発表の目的としている。

講演では渋沢敬三の人生観や生涯、歴史研究と民具へのアプローチ、そして民具の体系的分類や学名の設定などの試みについて言及している。渋沢が実践した歴史研究は、1930 年代前半の民俗学に対して、科学的視角の欠如を突きつけ民俗学方法論に修正を迫り、また民具学という新たな学問領域を開拓し、同時期の民俗学・歴史学を刷新

したと評価している。そして、渋沢の研究姿勢は総合資料学を目指し、博物館型研究統合を志向するものであり、現在の日本常民文化研究所がすすめる大学博物館設立の動きは歴史の必然である、と締めくくった。

（國學院大學 渡邊卓）

全国研究会

テーマ 地域と大学

日 時 2022 年 10 月 6 日（木）

10:30 ～ 16:30

場 所 神奈川大学みなとみらいキャンパス
4 階・米田吉盛記念講堂

形 式 ハイブリッド方式

司 会 明治大学

テーマ発題 専修大学

第 1 報告 明尾圭造氏（大阪商業大学）

「大阪商業大学におけるミュージアム環境——商業史博物館の企画と地位連携について」

（概要）「地域と大学」をテーマとした全国研究会の第一報告として、大阪商業大学商業史博物館の明尾氏より、同館の地域連携活動についての報告がなされた。商業史博物館は、近世大阪の商業、ひいては日本商業史をテーマとして貴重な歴史資料を収集・展示・保管する博物館である。近年では、大阪画壇をはじめとする地域資料の収集や地域のサークルとも連携した活動を行っている。明尾氏の報告では、商業史博物館を自校教育の場とする以外に、地域学の拠点として貴重資料を活用し、地域財の新たな掘り起こしを進めるといった様々な取り組みについて具体的に紹介された。大学ミュージアムが地域の社会貢献に如何に寄与するべきか、地域連携の中核の場としてどのように取り組むべきか、といった自校教育の枠

を越えた地域連携の「HUBステーション」としての可能性や将来性についても展望された。質問は、全報告後の総括討論の場で行われた。

(東海大学 椿田卓士)

第2報告 堀越峰之氏(帝京大学)

「地域にとって大学は、どんな存在になれるのか——「年史なし」「資料なし」「建物なし」のスタートから現在までの活動を通じて考えたこと」

(概要) ちょうど10年前となる2012年10月以来、帝京大学総合博物館の開設担当職員、その後学芸員として博物館運営を担ってきた報告者により、地域と大学博物館をめぐる問いと実践的な試みが語られた。

大学博物館が地域にとって必要なものとなり得るか。この大きな問いに向き合い、報告者と大学博物館との個人的な関わりや当会の松崎彰名誉会員との出会いを交えながら、「地域」の範囲が可変的であることに留意し、積み重ねられた「地域博物館」の取り組みを再確認した上で、帝京大学総合博物館の社会的役割を模索した経緯も示された。そして、人間形成の場となることを帝京大学総合博物館の機能の一つとして捉えると共に、課題を共有することで地域とつながるための「多摩のヨコガオ再発見プロジェクト」やフリーマガジン『ミコタマ』の編集刊行などの活動が紹介された。

(神奈川大学 大坪潤子)

第3報告 村上民氏・菅原然子氏(自由学園)

「東京都東久留米地域と自由学園——『学校から社会へ』の歴史的展開と現在」

(概要) 村上氏・菅原氏からは、昨年創立100周年を迎えた自由学園による、東京都東久留米地域での1920年代～現

在の地域協働に関する取り組みについて報告がなされた。本報告では「1. はじめに 女子教育の拡張運動としての『学校から社会へ』」、「2. 自由学園の教育理念と方法」、「3. 久留米村(現・東京都東久留米市)での取り組み」を村上氏が、「4. 戦後の再開」、「5. 近年の東久留米地域との協働・連携・自然環境保全・教育文化・福祉」、「6. まとめ」を菅原氏が担当した。村上氏からは、まず、演題の「学校から社会へ」というテーマと同学園の教育理念との関わりが示された。次に、関東大震災救援活動を契機とする社会的な取り組みとその展開について紹介後、地域との関係形成の一事例である久留米村の「自由学園農村セトルメント」について説明がなされた。菅原氏は、戦後～現在までの地域協働の事例を、年代毎の特徴や資料室の活動も踏まえて紹介された。同学園では、戦前からの地域への働きかけが継承され、現在も様々な活動が行われている。そうした脈々と続く地域との関係をどう引き継ぎ、いかに伝えていくかがアーカイブズの課題であり役割であるとして、本報告は締め括られた。

(日本大学 図子まほろ)

総括討論

司会 専修大学 神戸女学院

(概要) 今回の総括討論は会場参加者とZoom参加者の両方から質問を募り、報告者がそれに答えるという形式になった。質問は、学生と共に活動する際に受け身の学生を前向きに参加させるコツはあるか? 地域と関わるのは大学アーカイブズと大学博物館ではどちらがいいと考えるか? 地域資料と

なる可能性のある大学資料はあるか？
2006年の法改正以降、地域連携において変化はあったか、それとも何も変わらなかったのか？ 戦争関係の資料の扱いや、保存はどうしているのか？ 地域資料の収集と還元を考えた時に、地域の博物館などとの関係が出てくると思うが連携や棲み分け、もしくはそういう構想があるか？など多く寄せられた。最後に司会者より、今回のテーマは答えのない部分なので、しっかりしたまとめはしないが、いろいろな問題があると思う。よって、今後いろいろな議論ができるであろうと語られ、討論を終えた。

(武蔵野美術大学 阿久津朋子)

見学会

(概要) 見学会は、全国研究会3日目の10月7日に神奈川県立公文書館で行われた。当日は風雨が強く10月にしては珍しく大変寒い日であったが、33名の参加者を得ることができた。10時から始まった見学会は、まず公文書館の関根豊氏から「神奈川県立公文書館の業務と施設—公文書の評価選別を中心に—」と題して、公文書館の概要とともに神奈川県立公文書管理制度や公文書のライフサイクル、公文書の収集と評価選別について詳しい説明を受けた。その中で神奈川県立公文書館の大きな特徴として、公文書の保存・廃棄を決定する権限を公文書館に集中させるため、県機関が作成した公文書のすべてを公文書館が収集すること、文書完結後6年目から保存期間満了までの公文書を中間保管所で保存すること、選別基準に基づいて公文書館が歴史的公文書を評価選別すること、の3点を指摘された。

その後グループに分かれて、具体的に公文書の収集、評価選別、中間保管庫、保存等の実際を見学し、最後に企画展示「諸外国とつながる神奈川」を見学し12時過ぎに解散となった。

(淑徳大学 桜井昭男)

全国大学史資料協議会

東日本部会幹事会議事録

第207回全国大学史資料協議会東日本部会幹事会議事録

日時 2022年9月22日(木)

14:00～16:00

場所 神奈川大学みなとみらいキャンパス
4階・米田吉盛記念講堂

形式 ハイブリッド方式

出席 神奈川大学 國學院大學 淑徳大学
大東文化大学 帝京大学 東海大学
日本大学 武蔵野美術大学 明治大学
立教学院 古保達郎 檜皮瑞樹

オブザーバー 自由学園

議題

(1) 2022年度全国研究会について

- ・神奈川大学から準備状況について報告があった。
- ・事務局(専修大学)から全国研究会のテーマ「地域と大学」発題文案について報告があった。
- ・対面参加の帝京大学、自由学園により全国研究会のテスト報告があった。
- ・事務局(専修大学)を中心に全国研究会等における役割分担について申し合わせた。

(2) 会誌および叢書の編集について

- ・大東文化大学から会報67号の進捗状況について報告があった。また今後の全国研究会などの記録担当について意見交換した。

(3) その他

- ・事務局（明治大学）から聖心女子大学および南山学園の担当者変更について報告があった。

第 208 回全国大学史資料協議会東日本部会
幹事会議事録

日 時 2022 年 11 月 10 日（木）
15:00～16:10

形 式 Zoom によるオンライン会議

出 席 神奈川大学 國學院大學 淑徳大学
専修大学 大東文化大学 帝京大学
東海大学 日本大学 武蔵野美術大
学 明治大学 立教学院 古俣達郎
檜皮瑞樹

議 題

- (1) 12 月研究会について
 - ・淑徳大学から準備状況について報告があった。
 - ・当日は研究会に先立って幹事会を開催することとした。
- (2) ホームページの修正について
 - ・神奈川大学からホームページ改修にかかる見積書をもとに報告があった。
- (3) 2022 年度全国総会・研究会について
 - ・事務局（明治大学）及び東海大学から報告があった。
- (4) 幹事の緊急連絡先一覧表の作成について
 - ・幹事の緊急連絡先一覧表作成について事務局（明治大学）から提案があった。
- (5) 新入会員（山田兼一郎氏）について
 - ・山田兼一郎氏の入会を承認した。会費については来年度から徴収することとしたが、会費徴収については規約等を設けることを含め継続して審議する。
- (6) その他
 - ・事務局から、跡見学園女子大学・国際基督教大学・国土館・上智大学・東

京経済大学・東洋大学・獨協大学・日本女子大学・武蔵野美術大学・立教女学院の会員情報変更について報告があった。

- ・大東文化大学から叢書・会報の編集・発送状況について報告があった。
- ・叢書の東西両部会の按分について、事務局等の経験校から過去の事例報告があった。
- ・事務局（明治大学）作成の幹事校分担表の誤りについて指摘があり、次回幹事会で修正版を提示することとした。

第 209 回全国大学史資料協議会東日本部会
幹事会議事録

日 時 2022 年 12 月 15 日（木）
13:00～13:30

場 所 NPO 法人 ACOBA 多目的ホール
（ABIKOs ホール）

形 式 ハイブリッド方式

出 席 神奈川大学 國學院大學 淑徳大学
専修大学 大東文化大学 東海大学
日本大学 武蔵野美術大学 明治大
学 古俣達郎

議 題

- (1) 1 月研究会・3 月研究会について
東海大学及び古俣達郎氏から準備状況について報告があった。1 月例会は 1 月 26 日（木）に国土館大学において開催予定。
- (2) 2023 年度部会総会の会場について
専修大学（事務局）より、現時点で会場が未定であることの報告があった。

第 210 回全国大学史資料協議会東日本部会
幹事会議事録

日 時 2023 年 1 月 26 日（木）
13:00～13:20

会 場 国土館大学世田谷キャンパス

出席 神奈川大学 関東学院 恵泉女学園
國學院大學 女子美術大学 国士館
大学 専修大学 拓殖大学 玉川大
学 多摩美術大学 中央大学 東海
大学 東京農業大学 富山大学 名
古屋市立大学 日本大学 明治大学
立教学院 早稲田大学 亀谷篤志
古俣達郎 檜皮瑞樹

会長挨拶 豊田雅幸（立教学院）

総合司会 椿田卓士（東海大学）

講演 阿部武司（国士館大学政経学部）
「企業アーカイブと大学アーカイブ
—企業史料協議会での経験より—」
熊本好宏（国士館史資料室）
「百年史編纂事業と国士館史資料室
の取り組み」

〔概要〕本研究会では、まず東海大学・椿田氏より挨拶と趣旨説明がなされた後、国士館大学政経学部の阿部武司氏より「企業アーカイブと大学アーカイブ」、国士館史資料室の熊本好宏氏より「百年史編纂事業と国士館史資料室の取り組み」をテーマにそれぞれ講演を頂いた。阿部氏からは戦後における社史編纂事業の経緯と企業史料協議会と関わり、企業アーカイブが抱える課題と大学アーカイブ・大学形成との密接な関係等についての報告が、熊本氏からは百年史事業と資料室との関りや、大学（法人）内における資料室の活動、国士館大講堂の国登録有形文化財指定と学生ガイドの活用等について報告がなされた。質疑では、創業者家と社史編纂・企業アーカイブとの関係や、社史編纂のアウトソーシングの事例、年史編纂の成果と大学の広報活動との関係などが話題となった。研究会終了後には、大講堂の見学会があり、学生ガイドによる解説が行われた。

（檜皮瑞樹）

全国大学史資料協議会東日本部会 会員名簿(2023年1月31日現在)

- 1 愛知医科大学 アーカイブズ 医学情報センター（図書館）
- 2 愛知大学 東亜同文書院大学記念センター（豊橋研究支援課）
- 3 青山学院 資料センター
- 4 跡見学園女子大学 IR・大学資料室
- 5 お茶の水女子大学 歴史資料館
- 6 学習院 学習院アーカイブズ
- 7 神奈川大学 大学資料編纂室
- 8 関東学院 学院史資料室
- 9 国立音楽大学 校史資料室
- 10 慶應義塾 福澤研究センター
- 11 恵泉女学園 史料室
- 12 皇學館大学 研究開発推進センター
- 13 國學院大學 校史・学術資産研究センター
- 14 国際基督教大学 ICU アーカイブズ
- 15 国士館 国士館史資料室
- 16 国立女性教育会館 情報課
- 17 駒澤大学 禅文化歴史博物館大学史資料室
- 18 芝浦工業大学 経営企画部企画広報課 図書館
- 19 自由学園 自由学園資料室
- 20 淑徳大学 淑徳大学アーカイブズ
- 21 上智大学 ソフィア・アーカイブズ
- 22 女子美術大学 歴史資料室
- 23 成城学園 教育研究所
（成城学園百年史編纂室）
- 24 聖心女子大学 管理部総務課
- 25 聖路加国際大学 法人資料編纂室
- 26 専修大学 大学史資料室
- 27 創価大学 池田大作記念創価教育研究所
- 28 大東文化大学 大東文化歴史資料館

- (大東アーカイブズ)
- 29 拓殖大学 拓殖アーカイブズ事業室
 - 30 玉川大学 教育博物館
 - 31 多摩美術大学 大学戦略室 大学史担当
 - 32 中央大学 広報室 大学史資料課
 - 33 津田塾大学 津田梅子資料室
 - 34 帝京大学 帝京大学総合博物館
 - 35 東海大学 学園史資料センター
 - 36 東京経済大学 図書館・史料室
 - 37 東京女子医科大学 史料室・吉岡彌生記念室
 - 38 東京女子大学 大学運営部総務課 大学資料室
 - 39 東京電機大学 総務部(企画広報担当)
 - 40 東京農業大学 図書館事務課
 - 41 東邦大学 額田記念東邦大学資料室(法人本部経営企画部)
 - 42 東北学院 東北学院史資料センター
 - 43 東北大学 史料館
 - 44 東洋英和女学院 史料室
 - 45 東洋学園大学 東洋学園史料室
 - 46 東洋大学 井上円了哲学センター 井上円了記念博物館
 - 47 獨協学園 獨協学園史資料センター
 - 48 富山大学 アーカイブズ 総務部アーカイブ事務室
 - 49 名古屋市立大学 大学史資料館(教育研究部学術情報室)
 - 50 南山学園 南山アーカイブズ
 - 51 日本獣医生命科学大学 附属ワイルドライフ・ミュージアム
 - 52 日本女子大学 成瀬記念館
 - 53 日本体育大学 図書館
 - 54 日本大学 企画広報部広報課(大学史)
 - 55 フェリス女学院 歴史資料館
 - 56 法政大学 HOSEI ミュージアム
 - 57 北海道大学 大学文書館
 - 58 武蔵野美術大学 大学企画グループ教

- 学企画チーム 大学史史料室
- 59 明海大学 浦安キャンパス メディアセンター(図書館)
- 60 明治学院 歴史資料館
- 61 明治大学 大学史資料センター
- 62 明星学苑 学苑連携推進グループ
- 63 立教学院 立教学院展示館
- 64 立教女学院 資料室
- 65 立教大学 立教学院史資料センター
- 66 立正大学 学長室 大学史料編纂課
- 67 早稲田大学 早稲田大学歴史館(東伏見アーカイブズ)

以上
機関会員 67・個人会員 37 名・名誉会員 5 名

ご案内

全国大学史資料協議会および同協議会東日本部会に関するお問い合わせ、入会申し込みは、下記へご連絡ください。

【明治大学史資料センター】

〒101-8301

東京都千代田区神田駿河台1-1

TEL : 03 (3296) 4085

MAIL : history@meiji.ac.jp

【専修大学大学史資料室】

〒102-8275

東京都千代田区神田神保町3-8

TEL : 03 (3265) 5879

MAIL : archives@acc.senshu-u.ac.jp

会報編集

【大東文化大学 大東文化歴史資料館】

〒175-0083

東京都板橋区徳丸2-19-10

大東文化大学徳丸研究棟

TEL : 03 (5399) 7646